

三橋あゆみ⁶⁾ 工藤美智子⁷⁾ 對馬 真里⁸⁾

- 1) 東地方健康福祉こどもセンターこども相談部
- 2) 同総務企画室
- 3) 同保健部
- 4) 青森市保健所
- 5) 平内町
- 6) 今別町
- 7) 蓬田村
- 8) 外ヶ浜町

Key Words : ① 3歳児精健 ② 広汎性発達障害

I. はじめに

平成18年4月1日から平成18年10月6日までに青森市から3歳児精神発達精密健康診査(以下「3歳児精健」)の依頼があった20名について、実際に精健を実施して、広汎性発達障害チェックシート(以下「チェックシート」)の有用性を検討したので、報告する。

II. 目的

3歳児精健を通してチェックシートの有用性に関する評価を行う。

III. 研究方法

対象児と保護者に来所してもらい、児童福祉司が保護者と面接をして対象児の生育歴や日常生活状況について聴き取り、児童心理司は対象児の行動観察及び知能・発達検査、社会生活能力検査等の心理検査を行い、発達状況を確認した(社会診断及び心理診断)。また、保護者から希望があったものは、精神科医による医学診断を実施した。そして精健結果とチェックシート項目の関連性について検証した。

IV. 結果

1. 3歳児精健について

青森市3歳児健診の結果、精健の依頼があった20名のうち、最終的に精健を希望しなかった4名を除く16名について精健を実施した。16名中、社会診断、心理診断、医学診断のすべてを実施したのは4名であり、そのうち2名は広汎性発達障害、もう2名は精神遅滞と診断された。医学診断を希望しなかった12名については、社会診断及び心理診断から判定した。その結果、広汎性発達障害の疑いがある者が10名、精神遅滞水準にある者が2名であった。16名中、広汎性発達障害またはその疑いがある者が12名おり、全体の75%を占めた。他の4名は精神遅滞または精神遅滞水準にある者であった。広汎性発達障害またはその疑いがある12名中、5名は精神遅滞水準

広汎性発達障害のリスク児をスクリーニングするためのチェックシートの検討(3)
～チェックシートの有用性に関する評価～

福士 誠子¹⁾ 成田 尚之¹⁾ 星 敬子¹⁾
武田 哲¹⁾ 木村 哲子²⁾ 大柳 友子³⁾
榊 乃里子⁴⁾ 山下久美子⁴⁾ 小笠原淳子⁵⁾

にある者であった。

2. 青森市における3歳児健診時のチェックシートの判定および精健の結果について

3歳児精健の結果から広汎性発達障害またはその疑いのある12名について、青森市でのチェック項目を確認した。結果は表1のとおりである。

1) 20項目中最もチェックの多かった項目は、⑥会話が成立しにくい10名で、次いで⑯特定の物への執着8名、④オーム返し7名、⑧人見知りがあった6名、①始語の遅れと⑮他児への関心がないがそれぞれ5名で

あった。

2) 領域別の結果をみると、言語領域では多い順に⑥会話が成立しにくい10名、④オーム返し7名、①始語の遅れ5名であった。対人関係・社会性の領域では、⑧人見知りがなかった6名、⑮他児への関心がない5名、⑨母の後追いをしないと⑭他者から関わられるのを嫌がるがそれぞれ4名の順であった。常同及び執着の領域では⑯特定の物への執着8名で圧倒的に多く、次いで⑲手順、並べる順序、身につける物への執着が4名であった。

表1 3歳児健診及び精健の結果

領域 項目	言語発達障害						対人関係・社会性の障害								常同的及び執着的行動				問診・保護者アンケート6項目						精健の結果 判定・診断名		
	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮	⑯	⑰	⑱	⑲	⑳	1	2	3	4		5	6
	始語の遅れ	言葉の増加	ことが消失	オーム返し	遅延反響言語	会話が成立しにくい	過度のおとなしさ、過敏さ	人見知り	母の後追いをしない	あやされての反応	視線が合っていない	父母への慰め	行動の模倣	他者からの関わり	他児への関心	体を目的なく動かす	顔をしかめる、横目	手順・順序等への執着	特定の物への執着	特定の物への恐れ	始語の遅れ	会話が成立しにくい	視線が合っていない	行動の模倣	他者への関心	物や順序に対するこだわり	
1	1			1		1								1				1			1						広汎性発達障害(疑)
2						1		1						1				1	1			1	1		1	1	広汎性発達障害
3							1	1					1	1				1	1							1	広汎性発達障害(疑)
4	1	1		1		1		1	1				1	1				1	1		1	1				1	広汎性発達障害(疑)・精神遅滞水準
5		1		1		1												1			1	1				1	広汎性発達障害(疑)
6	1					1		1					1						1		1	1	1			1	広汎性発達障害(疑)・精神遅滞水準
7				1	1										1	1		1	1							1	広汎性発達障害(疑)
8						1												1									広汎性発達障害
9	1		1	1		1			1					1							1	1					広汎性発達障害(疑)・精神遅滞水準
10	1			1	1	1			1	1						1		1			1	1				1	広汎性発達障害(疑)
11		1				1			1													1					広汎性発達障害(疑)・精神遅滞水準
12				1		1		1					1					1				1				1	広汎性発達障害(疑)・精神遅滞水準
合計	5	3	1	7	3	10	1	6	4	0	2	0	1	4	5	2	1	4	8	1	4	11	2	0	1	8	

V. 考察

1. チェックシートの有用性について

チェックシートの使用によって精健を実施した者の75パーセントが広汎性発達障害またはその疑いがあったこと、また、これまでは精健不要となっていたと思われる知的障害を伴わない7件の広汎性発達障害またはその疑いのある者をスクリーニングできたことは、チェックシート使用の成果であると考えられる。

2. チェック項目の見直し

問診・保護者アンケートのチェックとして取り上げた6項目が実際に重要項目なのかどうかを検証した。言語領域では⑥会話が成立しにくい、④オーム返し、①始語の遅れの順に多かったが、オーム返しは言語獲得の過程ではよくみられることであるため、従前どおり「始語の遅れ」と「会話が成立しにくい」がチェック項目として適当であると考えられる。対人関係・社会性の領域では⑧人見知りがなかった、⑮他児への関心がない、⑨母の後追いをしない、⑭他者からの関わりを嫌がるが多かったことから、従前のチェック項目にあった⑬行動の模倣が乏しい(1件)を削除し「人見知りがなかった」の項目を入れること、⑮他児への関心がないと⑭他者からの関わりを嫌がるを合体させて「他児への関心がないか、関わられるのを嫌がる」とすることでより確実にスク

リーニングできると考えられる。⑪視線が合わないは健診では2名と少なかったが、精健では6名がチェックされた。これは保護者と専門家の捉え方の違いと思われる、健診時の聞き取り方の工夫により、チェック数の増加が予想される。常同的・執着的行動の領域では⑯特定の物への執着が多かったので、従前どおり適当であると考えられる。

今回の検討において、チェックシートの有用性がある程度認められた。今後の課題としては、チェックシートの表現の仕方や判定基準について、再検討していきたい。